

# 高齢者支援に必要なその人らしさについての因子構造 －介護老人保健施設における専門職の認識による検討－

保健科学専攻

学生番号 M310903

氏名 黒川 華代

---

【緒言】要介護高齢者が増加の一途をたどっている現在、介護が必要な状態になっても高齢者がその人らしい生活を送ることを可能とする個別ケアの質の向上が急務である。個別ケアの質を向上させるためには、要介護高齢者を支援する専門職間で高齢者のその人らしさに関する情報を共有することが有用である。そこで、筆者は要介護高齢者を支援する専門職間で使用可能な、その人らしさに関する情報共有シートの開発を目標としている。

【目的】本研究では情報共有シートの開発に向けて、介護老人保健施設の専門職が必要とする要介護高齢者のその人らしさについての因子構造を検討することと、高齢者支援におけるそれらの情報の必要度と収集頻度を明かにすることを目的とした。

【対象】関東地方、近畿地方、中国地方の介護老人保健施設に勤務する、介護士 167 名、看護師 75 名、作業療法士 31 名、理学療法士 16 名、支援相談員 23 名の計 312 名とした。

【調査手順】予備研究により作成した、高齢者のその人らしさに関する質問紙 (Personhood Questionnaire: PQ) を実施した。PQ は、その人らしさをあらかず 17 項目について、質問 1 では高齢者支援における必要度を、質問 2 では実際の情報収集頻度を、それぞれ 5 段階で回答を求め、質問 3 では 17 項目以外に高齢者支援において必要だと考えられるその人らしさの要因を自由記載の形式で問う質問紙である。なお、本研究計画は吉備国際大学倫理審査委員会の承認を得て実施した (受理番号: 09-14)。

PQ の回答に対して、以下の分析を行った。有意水準は 5% とした。

- 質問 1, 2 の記述統計を行い、必要な情報が実際に収集できているか検討した。
- 質問 1 の回答について因子分析 (主因子法, プロマックス回転) を行い、介護老人保健施設の専門職が必要とする高齢者のその人らしさについての因子構造を検討した。
- 質問 3 の回答についてテキスト分析を実施した後にクラスタ分析 (ward 法) を行い、PQ の 17 項目以外に必要とされている要因を検討した。
- 質問 1 と 2 の各項目の回答について Kruskal-Wallis 検定を用いて職種間での差を検討した。

【結果】Cronbach の  $\alpha$  は質問 1 で 0.87, 質問 2 で 0.91 であった。質問 1 の必要度は、特に性格、習慣、ライフスタイルが高かった。質問 2 の情報収集頻度は、性別、年齢、ライフスタイルを含む 7 項目が高かった。教育歴と人種・民族の 2 項目は、必要度、情報収集頻度ともに低かった。

必要度が高いにもかかわらず情報収集頻度が低い項目は、自己効力や生育歴などの6項目だった。

因子分析の結果、2項目が除外となり、4因子構造が得られた。第Ⅰ因子は、習慣、ライフスタイル、興味、性格、第Ⅱ因子は職業、教育歴、過去および現在の経験、生育歴、第Ⅲ因子は自己効力、能力の感覚、価値、困難への対処方法、第Ⅳ因子は性別、年齢、人種・民族から構成されていた。

質問3の回答に対してテキスト分析を行った結果、27のその人らしさの要因が得られた。各要因とその出現頻度を変数にクラスタ分析を行った結果、3つのクラスタが形成された。第1、第3クラスタはPQの質問項目と重複する要因で形成されており、第2クラスタはPQに含まれていない14の要因で形成されていた。

必要度と情報収集頻度を職種間で比較すると、必要度では5項目に、情報収集頻度では2項目に有意な差が認められた ( $p < 0.05$ )。

**【考察】** PQの17項目のうち6項目は、必要度が高いにもかかわらず情報収集頻度が低く、必要な情報が十分に収集できていないと判断された。そのため、これらが高齢者支援に必要なその人らしさの要因であるという明確な視点をもつことと、専門職間で情報を共有することが有用だと考えられる。

高齢者のその人らしさについての4因子は、それぞれ「生活様式形成因子」「経歴文脈形成因子」「心理行動影響因子」「基本属性形成因子」と命名できた。因子寄与率の最も高い「生活様式形成因子」を中心に、他の因子にも配慮した支援を行うことで、要介護高齢者の満足度の高い個別ケアを提供することが可能になると考えられる。

PQで用いた17項目以外の高齢者のその人らしさとして得られた14の要因は、今後その人らしさとして加える検討をすべき内容であり、その人らしさの新たな因子として位置づけられる可能性をもつといえる。

さらに、職種間で必要度や情報収集頻度に差がある項目は、各専門職の特徴を考慮して情報共有を行うことで、必要な情報を適切に収集することが可能となると思われる。

**【結語】** 本研究の成果として高齢者のその人らしさについての因子構造が示されたことにより、個別ケアを実施する際に検討すべき視点を具体化することが可能になると考えられる。また、専門職間での必要度と情報収集頻度の差を明かにしたことで、専門職の特徴を考慮した情報共有を促進し、専門職間連携に貢献すると考えられる。今後は、本研究で得られた高齢者のその人らしさの4因子構造に新たな14の要因を加える検討をするとともに、今回分析対象とできなかった専門職に関しても特性を吟味することで、高齢者のその人らしさに関する情報共有シートの開発を進めていく予定である。

キーワード：高齢者、その人らしさ、専門職連携